

「寄り添う医療」学ぶ 都市部の看護師経験者ら 日野病院

都市部の大学病院などで勤務経験がある看護師や助産師らのグループが16日、少子高齢化が進む中山間地域の医療、福祉の現状を学ぼうと公立の日野病院（鳥取県日野町野田）を訪れ、医師不足などの課題と向き合いながら実践する「寄り添う医療」の一端に触れた。看護師らを支援する笹川

保健財団（東京）の奨学金制度を活用して海外留学を控える20、30代の6人が、同財団の豊多悦子会長らと共に訪問。孝田雅彦病院長らから、開業医がいない地域の医療を支える自治体病院の実情を聞いた。

孝田病院長は、急性期から回復期、終末期まで「今できることはすべてやる考

え」とし、住民の健康情報がある「かかりつけ病院」の強みを生かせば計画立てた検査などできる管理も



できると強調。ポケットエコーなどの小型医療機器で質の高い在宅医療を提供し、大学病院と連携した「教育病院」の役割も果たしている」と説明した。

寄り添う看護の実践として近藤仁子看護局長は「疾患を治して終わりではなく、退院後の家庭環境までを考えて安心安全を支えている」と話した。

東京で急性期病院の看護師を経て、大学院で看護師の指導者育成を研究する小谷盛さん(27)は「地域と一結に考える医療が実際に行われている。高齢化がこれから進む全国で必要なことだと感じた」と述べた。

(吉川真人)

孝田雅彦病院長(右)の話に耳を傾ける看護師ら＝鳥取県日野町野田、日野病院